

も同然。心配するのは当然にございます。
私が、村々へ助け人足のお願いに参りまし
よう」

たえ「福助、それがよいでしょう」

伝右衛門「あーもう、頭の痛いこっちやわ。
じつはな、御代官様より怠慢やと叱責を受
けたばかりなんや。わしの持ち分だけが、
遅々として進まぬ」

叔母「与三兵衛があかんのやないか。現場を
うまく差配さはいできとらんのだや」

小太郎「叔母様、失礼を承知で申しますが、
与三さんは誰よりも長く働くし、無言の背
中に、みながついていっとります」

叔母「小太郎は黙っとれ。おまえはいつも与
三兵衛の肩を持つ」

伝右衛門「もうよい、騒ぐでない。小太郎も
与三と同じ、出水でみずで親を失つとるし、小信
川がうらめしかろう。しかし、はてさて、
どうしたものか……」

たえ「ほんに昔から『竜神の喉口』は、呪わ

れたようによう切れますこと。うらめしい
ことです」

伝右衛門「いや、たえさん、そうか、そうか
もしれぬぞ。こいつは案外、呪われとるや
もしれぬ。あるいは祟っておるやも」

たえ「祟り？」

伝右衛門「叔母様、そういえば中之坊に、ご
高名な御坊さんがおられましたなあ」

叔母「了^{りょうせい}誓^{せい}さんかい。南無阿弥陀仏と称え
れば、一切の悪霊が逃げ出すという」

伝右衛門「ここはひとつ、御坊さんに頼まれ
てはくれぬか？」

S E 神社の鈴を鳴らす

千歌（M）「その後^{あと}、嘘のように長雨は止み、
晴れ間が広がった。みな、これは御坊さん
の神通力だと触れ回った。私は独り、気づ
けば真^ま清^す田^だ神社にいた。あのとき、私の中
には鬼がいた。いっそ堤が切れてしまえば